

聖書：創世記 2：4～17

説教題：善悪の知識の木

日時：2019年8月11日（夕拝）

創世記 1 章 1 節～2 章 3 節にかけて、一通り、天地創造の 6 日間と 7 日目のことが記されました。すでにそこに天地創造のみわざの中心は人間の創造であったことが示されていましたが、2 章 4 節以降で改めて人間に関することについて別角度から詳しく記されています。ここに人間とは何であるのか、また人間に与えられている使命は何か、また人間はどのように生きるべき存在であるのか、すべての基本となる重要なことを学ぶことができます。大きく 3 つのことに注目したいと思います。

まず一つ目は、人間はどのような者として造られたのかということです。特に 7 節にそのことが記されています。そこに「神である主は、その大地のちりで人を形造り」とあります。ここに人間の素材となったものは「大地のちり」であると言われています。1 章 26～27 節で、人は神のかたちとして造られたということを私たちは見て来ました。神ご自身を鏡で映し出すような、特別の存在として創造されました。しかしだからと言って人は度を越えて誇り高ぶってはならない。私たちは大地のちりから成り立っているものです。後に 3 章 19 節で言われますように、死ねば土のちりに帰るに過ぎない存在です。そんな弱い存在、もろい存在、土の器のように壊れやすい存在です。そういう自分であることを私たちはわきまえる必要があります。

一方、神は「その鼻にいのちの息を吹き込まれた」とも書かれています。それで人は生きる者となりました。ここに人間は単なる物質ではないことが示されています。すなわち人間は霊的存在である。神の息が吹き込まれ、神と交わり、神と呼応する存在として造られた。ここに多くの世の人が知らない人間の神秘があります。今日も人間を単なる物質的観点からのみ説明しようとする考え方があります。その肉体だけでなく、人間の精神的活動や感情も、物質的構造の副産物に過ぎないとするものです。しかし聖書はそう言いません。確かに物質的元素よりなる存在ですが、同時に神のいのちの息が吹き込まれた存在である。物質的観点からある程度説明できますが、それだけでは説明できない特別な高貴さを持っている。そのような存在として私たちは自分を受け止める必要があります。

2 つ目に注目するのは人間に与えられた使命についてです。今日の箇所という言葉で言えば、「エデンの園を耕し、そこを守る」ということです。15 節にその表現があります。そしてこれは 1 章 28 節で見た「生めよ。増えよ。地に満ちよ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地の上を這うすべての生き物を支配せよ。」という、いわゆる文化命令と同じことを意味しています。神が人を置かれたエデンの園はどんなに素晴らしい祝福に満ちた世界だったのでしょうか。9 節を見ると「神である主は、その土地に、見るからに好ましく、食べるのに良いすべての木を」生えさせた、とあります。見た目にも美味しそうだし、食べればなお美味しいという沢山の食べ物で満ちていた。また 10～14 節を見ると、豊かな水がこの園にあふれていたことが分かります。第一の川はピション。第二の川はギホン。第三の川はティグリス。第四の川はユーフラテス。第一と第二の川はどこにあったのか定かではありません。従ってエデンの園の位置も今日からは不明です。水は生命にとって欠かせないもの、いのちの象徴ともなるものです。その水が豊かにそこを流れていました。さらに様々な資源も豊富だったことが分かります。ハビラの全土には金がありました。その地の金は良質で、そこにはベドラハとショハム石（欄外注：縞めのおまたはラピス・ラズリ）がありました。

このような素晴らしい世界でこれを耕し、これを守るという任務が人間に与えられたことは、どんなに大きな特権であり、また喜びを伴う作業であったことでしょうか。最初の人間が見渡すところは限りなく、全地に渡って神の栄光が輝いていました。彼の目に飛び込んで来るすべての造られたものに神の栄光が生き生きと刻み込まれていました。詩篇 104 篇 24 節：「主よ、あなたのみわざはなんと多いことでしょう。あなたは知恵をもってそれらをみな造られました。地はあなたのもので満ちています。」まさにこの賛美が最初の人間の心には炸裂したことでしょう。このような驚きと賛美の心をもって、彼は 1 章 28 節で命じられた「地を従えよ」という命令を遂行して行くのです。世界のすべてのものに輝く神の永遠の力、知恵、義、聖さ、慈しみを発見して、それらに驚嘆しながら、それらを神のご栄光のために活用して行くのです。

ここからも最初の人間は初めから完成した状態に造られたのではないことが分かります。彼には知らないことが沢山ありました。学ぶべきことが沢山ありました。目の前のものを用いて、神の栄光のためにそれらを用いて行くということを学ぶプロセスがあ

りました。こういう道のりを経て、彼は「神のかたち」という特性をいよいよ増大させて行く歩みの最初の地点にいたのです。そのコースをこれから一步一方踏み進んで、そうして最終ゴールに達すべきものとして造られたのです。その最後の地点に安息日が指し示す究極の安息が待っていたのでしょう。ですからアダムが与えられた働きは何の目標もない、つまらない作業ではなかったのです。それはより高い、永遠の祝福を目指しての、エキサイティングな、希望にあふれた働きの始まりだったのです。

三つ目に注目するのは、17 節の善悪の知識の木の禁令についてです。16～17 節：「神である主は人に命じられた。『あなたは園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは、食べてはならない。その木から食べるとき、あなたは必ず死ぬ。』」 多くの人がここを読む時にまず抱く思いはこれではないでしょうか。なぜこれだけダメと神は言われたのだろうか。さらにある人はこう考えます。これだけダメと言われると、人間はそれをしたくなる。だからこれは神が悪いのではないか。こんな制限を課した神が意地の悪い方として非難されるべきではないか。もちろんそのような批判は当たりません。神はここで「あなたは園のどの木からでも思いのまま食べて良い」と言われました。神は驚くほど寛大なお方、慈しみ深いお方です。人間は何をしたわけでもないのに、この素晴らしいエデンの園に人間を置いて管理を委ね、あなたはどれからでも食べて良いと言われたのです。しかしただ園の中央にある一本の木からだけは取って食べてはならないと言われました。これは最初の人間に対し、人間が神ではないということを思い起こさせるものでした。人間には超えてはならない一線がある。あの木だけは神にのみ属するものだから、あれからだけは取って食べてはならない。その木は「善悪の知識の木」と名付けられていました。その木から取って食べてはならないということは、善悪を決められるのはただ神のみであることを暗示しています。人間が勝手に善悪の基準を設けてはならない。その木に手を伸ばして神の権限を奪い取るようなことをしてはならない。それは神の上へのし上がろうとすることです。これほど良くしてくださった神に感謝せず、その神さえも自分の足の下に従わせようとする度を越えた高ぶりを意味します。

このような制限を加えられることは、人間にとって不自由を意味するのでしょうか。そうではありません。魚は水の中で生きるように定められています。その魚はそんな領域だけに制限されることは不自由だと考えて、水の外に出たらどうなるでしょう。死ん

でしまいます。魚は水の中にとどまる方がはるかに自由であり、生きる喜びを楽しむことができます。人間も同じです。人間は多くを許されていますが、善悪の知識の木からだけは取って食べてはならないと言われました。その神の主権を認め、神の主権の下で生きるという枠の中にある時、実は人間は最も自由なのです。またそこに人間の幸いがあるのです。

それにこれは決して難しい注文ではなかったことも私たちはよく考えてみたいと思います。神は人間が生きて行く上で必要なものを禁じたのではありません。これがなくては生活に困るというものではありません。禁じたのはたった一本の木です。それは他の木と特別に変わるところはありません。特別美味しいというものでもなかったのです。他の木と区別されていることは分かりますが、その木から取って食べなくても全然問題はありません。ですから神が与えた禁令は、ごくわずかなものであり、容易に守ることができたものでした。これはただアダムを試す役割を持っていただけなのです。アダムは果たして神に信頼し、神に従う者なのか。神はこの木から取って食べるなどお命じになりましたが、その理由は何も語っておられません。食べたらどうなるかということは言われましたが、なぜ食べるべきでないか、その理由は示しておられません。その理由は教えられていなくても、ただ神がそうお命じになったからということだけで、この神の命令に従うかどうか。アダムはすでに神との交わりを通して、神の大きな愛、その慈しみ、その恵み、その聖さを豊かに味わっていたでしょう。そんな彼はいくら分からないところがあるからと言って、そのことで神を疑って良いものでしょうか。たとえ自分に知らされていないことがあっても、神は最善のお考えと計画とを持っておられるに違いない。その神に心から感謝し、全く信頼している証として、私は神の命令に従って歩もう。そのように歩むかどうかを試されたのです。これは彼にとってのテストです。テストはその人がどういう状態にあるかを明らかにするものであり、また正しく用いられるなら、テストされる人をより強くし、成長させるものでもあります。彼はこのテストを通して霊的・道徳的により強い者とされ、神を愛し、信頼し、従う歩みにおいて成長を遂げ、さらなる祝福へ進むようにとのプロセスの中に置かれたのです。

そしておそらくそのゴールに達した時に初めて、園の中央にあるもう一つの木、いのちの木から取って食べる事が許されたのでしょう。その定められた道のりを最後まで進んだ時、その最終状態に入ることの証印となるものとして、この木があったと考えら

れます。

一方、もしこの善悪の知識の木の禁令を破ったら人は死ぬこととなります。「あなたは必ず死ぬ」と言われています。魚が定められた水という領域の外に出たら死ぬように、人も神との交わりの外に出たら、死以外、何もなくなります。それは第一に霊的な死を意味します。神との関係が切れたことによる死です。そしてそれはやがて肉体の死、さらには永遠の死に至ることになるでしょう。

さて、この結果はどうだったでしょうか。そのことは3章で見ることになります。最初の人間アダムは、この命令を破ってしまいます。ではもう、この最初に与えられた命令は私たちに関係がないものなののでしょうか。そうではありません。神は人間のためにご計画くださったこの祝福の道を投げ捨てず、キリストを遣わし、その方と私たちを結び合わせて、この道に立ち返らせてくださることが、この後の聖書で示されて行きます。今夕この箇所から改めて心に留めたいことは、私たちの幸いはどこにあるのかということです。それは自分の好きなように生きる場所にあるのか。何の制限もなく、神の命令も無視し、自分が神ようになって生きる場所にあるのか。それとも私たちにいのちの息を吹き込んで祝福してくださった神を神としてあがめ、その命令に従って歩む場所にあるのか。箴言1章7節：「主を恐れることは知識の初め。」 主への恐れ敬いなくしては、私たちは何も知ることができず、暗闇の中を歩むだけです。恵みの神を仰ぎ、この方に信頼し、この方の御教えに従って生きること。そこに私たちの真の祝福があるという真理は今日も変わりません。私たちはそのように生きるようにと造られている者たちです。その御心を改めて受け止めて、キリストにあって神との正しい関係に回復させていただき、この神に感謝し、信頼し、従う歩みへ進みたいと思います。そしてその道を最後まで進むことへと導いていただいて、その最後にいのちの木から取って食べる幸いへと導かれる者にされて行きたく思います。